

# 「サイレント・ウェイ式仮名導入表」使用解説

[2014 年度新版改訂]

言語・生活研究所  
早稲田大学名誉教授  
川口義一

## ◇ 五十音図の「サイレント・ウェイ式」導入

仮名文字の表記と発音の指導のために、サイレント・ウェイによる五十音表の導入(以下、「SW 式」と略称)を推奨しますので、励行してください。と言っても、仮名文字はシラビックな音のまとまりを文字にしたものですから、アルファベット型表記の他の言語のように、サイレント・ウェイの特色である特殊なカラー・チャートを作る必要はなく、始めからふつうの市販の五十音表を基にして作った「仮名導入表」を使います。

まず、黒板に「SW 式」の仮名導入表のうちからひらがな表を貼り付けて、日本語には五つの母音があって、それがいちばん右の一行であることを説明してから、ポインターで「あ」を指して、この音が何であるか類推して出してみるように学習者に指示します。「あ」の音はどの言語にでもある基本的な母音の一つですから、「母音を出してごらん」と言うと、多くの場合は「あ」が出できます。「あ」の音を出した学習者が特定できたら、その学習者にもう一度同じ音を出すように促して、その音でよいことを、「はい、その音です」と声に出して確認し、他の学習者にも言わせませす。全員が「あ」と読めたところで、次に「い」を指して、同じように進めます。もし「あ」を指した時に「い」と読む学生が多かったら、そこで「違いますよ」と言わないで、むしろ「い」を指して、「それは、この字の読み方です」と教えて、練習させ、改めて「あ」に戻ります。これが「SW 式」の、「教授は学習者の学びに従属する」という重要な理念の現れるところですので、いつも念頭において意識して指導してください。

続いて「お」「え」「う」と進みます。この順に進むのは、「お」と「え」は、言語によってさまざまな音で表されたり、もともと無かったりするので、「もっと唇を丸くして(「お」が「あ」に近くなったり、あいまいな音になったりする場合)」とか「もっと唇を横に引いて笑うみたいに(「え」が「い」に近い場合)」などと指示して、口の形を変えてトライさせるなど、指導に工夫が必要なことがあるからです。それでも、学習者が試行錯誤してきれいな音が出るまで、教師は我慢して待っていてください。けっして、モデル音を出して聞かせて、「まねしてみろ」という指示をださないこと。これも、「教授は学習に従属する」という理念の指導上の現れです。

それでも、「お」と「え」は初めから正しい音が出せる学習者がいて、早い段階で全員が出せるようになりますが、「う」になると、唇を前に突き出す、深い[u]の発音をす

る学生のほうが多くなるのが普通ですから、その場合は「違います」と言って、正しい音が出るまでトライさせてください。もちろん、途中で正しい音が出せるように、「唇を引いて」とか「おなかが痛くて、苦しい時のうめき声みたいな音」などと、学習者のトライの手がかりになるようなヒントを与えて、支援してください。正しい音が出たら、他の母音と同様、「はい、いまのキムさんのが正しいですね。はい。キムさんもう一度。はい、みなさんもどうぞ」というように進めて、練習してください。

次に、「か行」から「わ行」までを示し、それがすべて子音と母音の結合したシラブルであること、および母音の列に横に並ぶひらがなは、すべて同じ母音を共有し、その行の縦に並ぶひらがなはだいたい同じ子音を共有するシラブルであることを教えて、「か」から読み方の類推をさせます。あとは、母音のときと同じ、発音が変わったら正しい音が出せるようにヒントを与え、指したひらがな以外の音で読んだら、そちらの音に該当するひらがなに飛んで、「それは、こっちですね」と言いながらも一度読ませるなどして、学習者のトライした音がどこかの文字に結びつくように指導していきます。濁音・半濁音は、ひらがなを指したあと、表の左はしにある濁音記号と半濁音記号にポインターを移し、該当する記号をひらがなの右上の端に運ぶような動きで表します。一度、濁音・半濁音の表記の方法が理解されたら、次に濁音・半濁音系の発音をするときは、濁音・半濁音ともに、まず記号を示して、それから文字を示します。こうしないと、先に指した音の発音をしてしまい、あとで濁音や半濁音に直すことになってしまって、効率がよくないです。もっとも、清音の音を出させてから濁音・半濁音に進むという方法で清音と濁音・半濁音の相違を意識化するということもできますが、「か行・さ行・た行」ではそれでいいものの、「は行」では子音が濁音・半濁音と有声・無声の対立になっていない（「は行」は濁音系と半濁音系が有声・無声の対立になります）ので、あまりこの方法を長く続けると混乱させてしまう恐れがあります。

拗音は、同様に「や行」の小さい文字をひらがなの右下に移すようなポインターの動きで示します。なお、「や行」の音は、「い」と「あ」「う」「お」をくっつけて発音するように指示すれば、学習者が探り当てるのを待たなくても、導入できます。「わ」も、「う」と「あ」をくっつけるように指示して導入できます。SWは、発見学習を重視していますが、教師がヒントを与えて学習を促進することは禁じていませんので、モデル音を与えない限り、いろいろ工夫して目標の音が早く見つかるように支援してください。

そのことは、「し」「ち」「つ」「ふ」の子音が同じ行の他の音と違うことに注意させるときにも、重要なテクニックになってきます。例えば、「し」は「さ行」の「い列」ですから、そのまま類推すれば「スイ」が出てきます。しかし、これはカタカナ表記で可能になるものなので、ここだけ子音が違うことを説明してください。そのためには、「うるさく話す人に静かにするように伝えるとき、口の前に人差し指を立てて出す音は？」のようなヒントを与えて支援します。「ち」は「し」に、「つ」は「す」にt音を加えたものというヒントは、多くの場合きわめて有効です。このとき、ついでに、ウ列音、特

に「す」「つ」「ず／づ」の「う」が他の「う」よりさらに狭い母音であることをしっかり意識化させることが大事です。この非常に狭い「う」の音を意識しておく、母語干渉で「つ」が「ちゅ」、「す」が「しゅ」のように発音されてしまうことを予防できます。なお、以上のことに注意が向くように、「し」「ち」「つ」「ふ」の四つの文字は、表では茶色(赤に見えますが、茶色です。すみません)でマークしてあります。この色の違いを発音の意識化に役立ててください。

「ん」は、後述するちいさい「つ」同様、唯一子音だけの文字(そのことを赤色でマークしました)ですが、「な行」の頭の子音や、「ま行」の頭の子音や、鼻に抜ける[ng]みたいな、それでいてのど仏のあたりで出る変な音だということで、適当に指導してけっこうです。ただし、子音のくせに非常に長いことその音を出し続けることを示してください。ここをいい加減にすると、特殊音素の撥音のイメージがつかめないままになってしまい、後の発音学習に支障をきたします。また、子音としては、ら行音・ざ行音なども該当する子音が学習者の母語にないことも多々あり、少々めんどろです。ヒントを工夫して発見を促進してください。これらの少々やっかいな子音を含むシラブルを教える時には、ヴェルボ・トナル法のテクニックが役に立ちますが、ここでは詳細にふれる余裕がありませんので、川口にお問い合わせください。

濁音・半濁音・拗音・撥音まで進んだら、単語を導入します。例えば、「い」と「す」をポインターで指し、音を続けて「いす」の音を示して読ませます。このとき、「す」のほうを「い」より少し高い音で読むようにジェスチャーなどで指導すると、アクセントも同時に学べます。平板のアクセントが難しいようなら、「まど」のような頭高型のアクセントを持つ単語から始めるのがよいでしょう。アクセントも含めて、ちゃんと読めるようになったら、それが「椅子」や「窓」であることを説明して、次の単語に移ります。できるだけ短時間のうちに、4拍（「ふでぼこ」など）から6拍（「こくばんけし」など）ぐらいの単語に進んでおきます。「あおいえ」のような名詞句や「これは、ほんです」のような短い文もできます。

次に「い」「う」「つ」の色違いの文字を使うことばの表記を指導します。最初のふたつは、それぞれ「え」で発音する「い」「お」で発音する「う」、すなわち「長音」で、最後のものは「促音」の表記です。つまり、「長音」では、緑の「い」を指したら「え」と読み、青の「う」を指したら「お」と読んで、前のシラブルの母音とくっつけて伸ばして発音せよと指導するわけです。「促音」の赤い、小さい「つ」は子音ですが、「大きな休止」として導入するのがよく、「ダブルの子音」であるという説明よりも、次のシラブルの頭の子音へ行くときのポーズであるとして、その子音が発音されるまでゆっくり時間をかけて音を止めるか伸ばす(子音が[s][dz]の場合)かしているというイメージのほうがうまくいきます。これも、ヴェルボ・トナル法の応用で、分かりやすく示すことができます。ご興味があれば、お尋ねください。

これらの音は、単語のレベルでないとは指導できないので、「とけい」「ぼうし」「ざっ

し」などの単語例で練習します。「がっこう」などの複合したものも、積極的に扱うようにしてください。文型・文法の学習に入ってから、あるいはそれ以前に簡単な文などを作らせて、助詞の「は・へ・を」も、色の違いに注目させて、同様に導入するとよいと思います。

ここまで来たら、文字を指しながら、「すしは、好きですか」のような質問を作らせてその意味を教え、この質問に Yes と答える人と No と答える人を挙手させて確認し、それぞれ仮名表の文字を指して、「はい」「いいえ」の答えを言わせてみます。そこまでできたら、学習者同士お互いに質問させ、「はい」「いいえ」の答えで Q&A の練習をします。それが済んだら、どの程度好きか嫌いかなどを聞きだし、それぞれの具体的な答えに応じて、「だいすきです」「まあまあです」「あまりすきじゃないです」「だいきらいです」などを示して発音させ、この答えをもってまた Q&A の練習をします。オーディオ・リンガルの教授法と違いますから、みんなで「だいすきです」と発音させる必要はまったくありません。そう答えたい人だけが、その言い方を学びます。

このあと、だれかに好き嫌いを聞いてみたい飲食物は何かと問いかけて、「にく」「さかな」などから「ぎゅうにゅう」「こうちゃ」などまで、いろいろと出てくるものを導入して練習すれば、食べ物の好き嫌いに関する簡単な会話ができます。「ぎゅうにゅう」が出れば拗長音が、「こうちゃ」が出れば、「お列」の長音の「う」表記の確認ができます。クラス揃って「せんせい、こうちゃは好きですか」と聞かせれば、「え列」の長音の「い」表記や「ん」の拍の長さも確認させられます。

こうして、できるだけいろいろな飲食物が出るように促しますが、そのうちに「ハンバーガー」や「コーラ」が出てきますので、「それは、今日はできない。また、次の時間に」とカタカナ学習への布石を置いて、学習者の興味を喚起してください。

カタカナの「SW 式」導入も、同じように練習します。カタカタは、「外来音を表す」という重要な機能があるにもかかわらず、市販のカタカナ五十音表ではひらがなと同じ構成なので、カタカナの指導が不十分だったという意識から、この「仮名導入表」が発想されたと言ってもいいくらいです。この「SW 式」カタカナ表の最大の工夫は、表の左の端に長音記号をおいた(縦書きの長音記号と横書きの長音記号の間の「=」は「等号」で、この二つ記号の機能が同じであることを示します)こと、およびア行の音のすべてに小さな文字つけておいたことです。これによって、「ジュース」のような長音を含む単語と「グァ」「ティ」「トゥ」「ジェ」「フォ」「ウィ」など、ひらがな表との対応では表れない音の表記を示すことが可能になりました。これは、市販のカタカナ表では相当の工夫をしないとできないことでした。(「デュ」は、市販のものでも示せますが)

もう少し詳しく言うと、まず、「ウ・ク・ツ・フ」を水色で、「キ・シ・チ・ニ・ヒ・ミ・リ」を緑色で示しました。これによって、ひらがなとは異なる、カタカナのあるべき表記機能をはっきりと指導できるようにしました。これらのイ列音とウ列音は、それ

ぞれ、小さい「ア」行音か小さい「ヤ」行音をつけることで、もともと所属する行とは別の行を作って、日本語で表記できる音の数を増やしています。その際、小さい「ア」行音を加えて独自の行を作れるのが水色のカタカナ、小さい「ヤ」行音を加えて独自の行を作れるのが緑色のカタカナです。そのことが分かりやすいように、小さい「ア」行音は水色で、小さい「ヤ」行音は緑色で示しました。ただし、もともとの「ヤ」行音には、「エ」列音がないので、その部分だけは小さい「ア」行音の「エ」を借りて表記します。「シ」の行を例にとれば、「シャ・シ・シュ・シェ・シヨ」となって、「シェ」だけが小さい「ア」行音の「エ」を使うということです。そのことが分かりやすいように、小さい「ア」行の「エ」だけは、オレンジ色にしました。

次に、前述した水色の「ウ」に濁点を付ければ、「ヴ」の表記が示せますので、これによって「ヴァ行」の表記が示せるようになりました。もちろん、発音は「バ行」と同じになりますが、この表記によって原音がVで始まることを示せますので、外来音の表記方法として便利であり、またこの表の合理性を示すもう一つの例にできます。

なお、ハ行のウ列音、ヤ行のイ列音はカタカナでは表記不能です。前者は、「フ」か「ホ」で、後者は「イ」で代行させるしかありません。ただし、ヤ行のイ列音は「イェ」と表記できます。それでも、ワ行ウ列音は「ウ」で代行し、「ウウ」とは書きません。

カタカナも、導入しながら単語や句や文を作って、発音や会話の練習をさせます。ひらがなの学習の続きで、「ジュースは、好きですか」などができますから、ジュースの種類を特定させて、「バナナジュース」「オレンジジュース」「パイナップルジュース」などを導入します。音節の長いことを恐れずに、学習者の知りたいことばを音にしてください。さらに、人名も地名も発音させることができるので、「みなさん、こんにちは。ヴァネッサ・ツィンマーマンです。ベルギーのブリュッセルからきました。どうぞよろしくおねがいします」などという自己紹介も可能になります。

なお、「ストロベリー・ジュース」と「イチゴ・ジュース」のような、外来語も和語もともに使用することばが出てきた場合は、日本語では外国語由来のことばだけでなく、動植物名もそうとうの頻度でカタカナ表記されることを教えてもいいと思います。

最後に、片仮名の「ヲ」ですが、これは、「スママセーン、水ヲクダサイ」のような外国語なまりの日本語を表すときを別にすれば、いままでのところ「ヲタ踊り」と「エバンゲリヲン」くらいにしか使われていないので、扱わないことにし、表に載せませんでした。

ここまで、書いてまければお分かりのように、SW式の教授法では、「サイレント」と言いながら、教師が学習者の母語や媒介語を使って説明することに問題はありません。目標言語の音そのものを、教師がモデルとして出さない(出してしまうとオーディオ・リンガルになってしまい、自律学習が阻害されます)から「サイレント」なのだとお考えください。

2009年からこれまでの実践経験では、世界中、どのタイプの学習機関(高等教育・中等

教育・成人教育)でも、ひらがなの学習に60分～70分、カタカナの学習に同じくらいの時間しかかかりません。それで、一度おおざっぱに学習して表記の全体的な見直し(cognitive map)を作り、あとは毎日この表からスタートして、その日の学習項目や学習者が知りたい新しいことば(必ずしも教科書に載っていません)を学ぶ支援をしていきます。文レベルや長い複合語などを導入するときは、教師も心配になるものですが、**学習者は、わずか二、三回の導入で仮名表をしっかりと見て、ちゃんと語句や文を発音してることが分かり、教師として学習者の認知力について目を覚まされることが多いです。**

「SW式」仮名表が自由に読めるようになったら、教師が発音したものを学習者にポインターで指させるとか学習者同士で読みの練習をさせるとか、より積極的に表を扱えるようにしていきます。**書きの練習は、教師の発音を正しく指せるようになってからでも遅くはありません。**もちろん、それ以前に書き練習を始めてもいいのですが、読めたからと言って書けるようになっていないとは限らないので、教師はそのギャップを念頭に、焦らず指導することを忘れてはいけません。

SW式の仮名指導は、何日かかけて再発見し、思い出しながら学習していく過程を支援する教授法なので、一つずつ正確に発音できたり、書けたりするまで何回もやらせるのではなく、**初回はとにかくざっくりと五十音を終わらせることを目標にしてください。**しかし、英語とも中国語とも違う音がいろいろとあること、促音・撥音・長音などの特殊音素があることなどは、きちんと意識化して、次回以降もその意識を高めるように指導してください。

この仮名表は、文や単語の導入がやりやすく、初回のうちから語句や文の発話が可能なことに特徴がありますので、単音が全部終わる前に、できるところから、どんどん意味のある音列を作らせてください。途中でご紹介した「すしは、すきですか」なども、「すし、すき？」で導入すれば、「か行」と「さ行」の導入だけで作れます。このように工夫をして、早く単なる音の練習ではないことを示したほうが、学習意欲を高められます。また、**文が長くなってきたり、新しい単語(特に、漢語や外来語)が出てきたりするたびに使えば、発音と表記の関係を再認識させることも可能なので、初級の全課程にわたってクラスに貼っておき、利用するといいでしょ。事情が許せば、学習者にフルカラーのコピーを渡しておいてもいいと思います。**

なお、単語・語句・文と言語形式が長くなっていくにつれて、プロソディー・レベルでの発音練習も必要になってきますが、これも、サイレント・ウェイより、ヴェルボ・トナル法ほうが効率的に学習支援できます。ご興味があれば、川口にお尋ねください。